

I 研究主題

「児童生徒主体の授業づくり ～小・中・高の更なる一貫性・連続性を求めて～」

(3年研究の3年次)

II 研究主題設定理由

本校は、平成12年度に「一人一人の子どものよさを生かす授業づくり～個に応じた指導の在り方を求めて～」というテーマで学校公開研究会を開催し、以来一貫して授業づくりを追究してきた。

平成18年度～20年度研究主題「児童生徒一人一人が主体的に活動できる授業づくり」では、特別支援教育の本質を「教育的ニーズに応じた教育」と「自立・社会参加の実現に向けた取り組み」と捉え、学校教育目標「一人一人がよりよい存在として輝き、主体的に生きられるよう社会的自立を支援する」との関連において整理を図った。

また、平成21年度～23年度研究主題「児童生徒主体の授業づくり～各学部の中心的活動における支援の最適化を通して～」では、PDCAサイクルを活用した支援の最適化を通して、児童生徒が主体的に取り組むことができる有効な支援の手だて「活動の流れの工夫」、「場の設定、教具等の工夫」、「教師のかかわりの工夫」の蓄積を図った。

このように、一定の成果を上げてきてはいるものの、昨年度までの研究が、小学部低学団「遊びの指導」、小学部高学団「生活単元学習」、中学部「作業学習」、高等部「作業学習」と学部ごとの取り組みであったことから、小学部から高等部までのつながり、小・中・高における教育内容及び教育方法の一貫性・連続性が課題として挙げられた。

そこで、児童生徒主体の授業づくりにこだわり、本校の学校教育目標「一人一人がよりよい存在として輝き、主体的に生きられるよう社会的自立を支援する」の実現に迫りたいとの考えから、本研究主題を設定することとした。

なお、研究主題の副題「小・中・高の更なる一貫性・連続性を求めて」には、新学習指導要領に位置づけられた、キャリア教育の充実という意味合いも込められている。従来から特別支援教育が重視してきた「自立と社会参加の実現に向けた取り組み」をキャリア教育の視点から捉え直し、充実させていくものである。本校の児童生徒にとって、生涯にわたる継続的な生きがいややりがいの蓄積、学部の枠を超えた支援の在り方が今授業の中で求められている。本校では高等部が設立されてから、キャリア教育の実践・充実への関心が更に高まってきていることも踏まえ、研究サブテーマとして「小・中・高の一貫性・連続性」をキャリア教育のための重要な柱として捉え、位置づけた。

III 研究目的

授業実践を通して、児童生徒が主体的に活動できる支援の手だての最適化を図りつつ、その一貫性・連続性を検討する。

IV 研究仮説

小学部から高等部までのつながり、教育内容及び教育方法に一貫性・連続性のある授業実践を重ねれば、児童生徒がより主体的に活動できるであろう。

V 研究内容

1年次…各チームにおける主体的に活動する姿のおさえを行い、そのために行われている支援を明確にし、全校で共通理解する。

2年次…1年次の課題解決を図りながら、チームの独自性や一貫性・連続性のある支援の手だてについて探る。

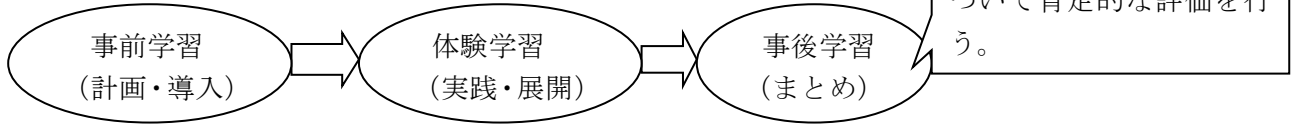
* 3年次…一貫性・連続性のある有効な支援の手だてについて、実践の蓄積を図る。

VI 研究方法 < 3年次の具体的取組 >

- 1 昨年度まで各チームに残された課題解決を図る。
- 2 授業づくりを通して小・中・高の一貫性・連続性を更に高める。
「一貫性・連続性」を具現化するための取り組みについて、以下の(1)(2)で述べる。

(1) 授業案を有効に生かす

ア 単元設定・計画の工夫

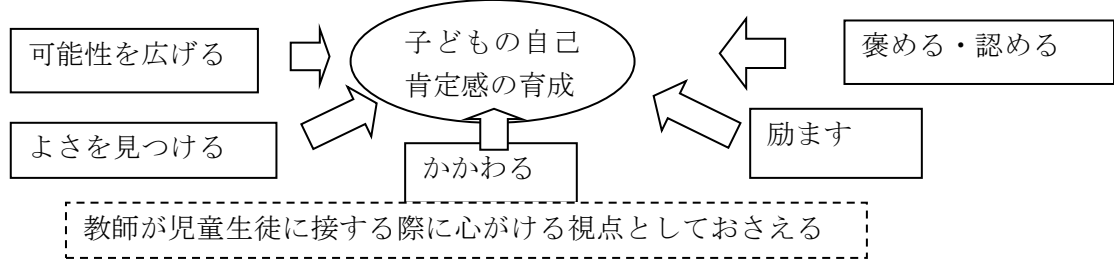


イ 児童生徒主体の授業づくりにおけるキャリア教育の視点に立った3つの捉え

- ・「授業及び個々の児童生徒のねらい」の明確化・個別的な捉え。→ (支援があれば●●できる)
- ・コンピテンシー (能力観) での捉え。→ (学んだ知識・技能・意欲を他の生活場面で活用できるか?)
- ・授業及び個々の児童生徒への学習プログラムからの捉え。→ (学習プログラムの更なる活用)

ウ 自己肯定感の育成

- ・授業の際に教師がどのような支援を取り入れているか検討する。



(2) チーム交流研究会の充実

ア 情報の共有 (指導案のほかにビデオなどの活用)

イ 小・中・高の学習内容、支援方法の一貫性・連続性について更に検証する。

< 参観の観点 >

授業及び個々の児童生徒に発達段階に応じた学習内容 (学習プログラム) がどのように盛り込まれているか。

ウ 事例対象児童生徒の支援指導方法の検証

- ・事例対象児童生徒に適用した学習プログラムと支援指導方法の関連について検証する。

VII 研究計画 交：チーム交流研究会指定授業 本校助言者 岩手大学教育学部教授 名古屋恒彦先生

回	月日 (曜日)	形態	時間	内容	名古屋T
1	5月 2日 (金)	全校	16:00~16:50	平成26年度校内研究提案	○
2	6月 3日 (火)	全校	15:50~16:50	キャリア教育研修会 (県教委)	
3	7月 3日 (木)	チーム	15:50~16:50	研究授業① (小低交)	○
4	8月 28日 (木)	チーム	15:50~16:50	研究授業② (小高交)	○
5	11月 13日 (木)	チーム	15:50~16:50	研究授業③ (中交)	○
6	11月 19日 (水)	全校交	10:35~12:15	研究授業④ (高:作業学習交)	○
			14:50~16:50	授業研究会	
7	12月 4日 (木)	チーム	15:50~16:50	研究まとめ	
8	1月 22日 (木)	チーム	15:50~16:50	研究まとめ	
9	2月 12日 (木)	チーム	15:50~16:50	研究報告	○

特別支援教育

新学習指導要領

教育的ニーズに応じた教育

自立・社会参加の実現に向けた取り組み

教育的ニーズ

主体的に取り組みたいという子どもの思いに応えるための最適な支援の必要性

自立

適切な条件下で、自分の力や個性を最大限に発揮してなされる取り組み

<学校教育目標>

一人一人がよりよい存在として輝き、主体的に生きられるよう社会的自立を支援する。

H21～23年度研究テーマ

「児童生徒主体の授業づくり～支援の最適化を通して～」

主体的に活動するための手だての工夫（できる状況づくり）

○活動の流れの工夫

●場の設定、教具等の工夫

○教師のかかわりの工夫

計画(PLAN)

実践(DO)

支援の最適化 (PDCAサイクル)

改善(ACTION)

反省(CHECK)

平成26年度研究テーマ（3年研究・3年次）
「児童生徒主体の授業づくり
～小・中・高の更なる一貫性・連続性を求めて～」

小学部1～3年生

遊びの指導

授業数…3

小学部4～6年生

生活単元学習

授業数…3

中学部

生活単元学習

授業数…3

高等部・訪問教育部

作業学習・自立活動

授業数…3

○全体研究会…2回（4月・2月）

○チーム研究会…6回（6月～1月）

○チーム交流研究会 4回

○全校授業研究会（11月）

Ⅷ 研究経過

1 校内研修①「全校研究会」（5月2日）

- (1) 教務主任より本校のキャリア教育全体計画の説明を全教職員で確認した。
- (2) 昨年度作成した「キャリア教育学習プログラム（枠組み）（みたけ版）」（以下「学習プログラム（みたけ版）」）について更なる蓄積を図るために、児童生徒主体の授業づくりに実際に盛り込むことや、自己肯定感の育成を育むための観点について具体的に検討していくこととした。
- (3) 名古屋先生より、「子ども主体の教育の連続性・一貫性～キャリア発達の観点における教員の専門性の育成とは～」と題して講演をいただいた。内容については以下のとおりである。

I 知的障がい教育の一貫性・系統性

知的障がい教育については小・中・高等部ごとに教育課程が分かれている。しかし、児童生徒主体の学校生活の観点から考えた場合、学校生活を6・3・3年とするか12年とするかについては2者択一で議論するものでなく、どちらも大事な視点である。

II キャリア教育から学校生活を考える

1 職業教育とキャリア教育

職業教育は高等部中心でなく、小学部段階から検討されていく必要がある。また、より幅広い進路先を確保する上でも知的障がい教育においては、職業教育も普通教育も同時に展開されなければならない。

2 すべての学部、ライフステージで子ども主体のキャリア教育を

職業教育とキャリア教育は理念的に同一視できるが、キャリア教育が職業訓練的にならないように配慮しなければならない。キャリアはワークキャリアとライフキャリアに分けて考える。

日々の学校生活で、ライフステージにふさわしい活動に主体的に取り組み、やりがいと手応えのある生活を営むことができれば、ライフキャリアの充足各年齢段階で実現できる。

3 節目を大切に

ライフステージ全般に立った視点をもちつつ、各学部の節目を教師が意識することで、それぞれのライフステージに固有の価値を認めた教育活動が展開できる。

4 まとめ～日々の子ども主体の生活の豊かな充足を図る「できる状況づくり」を～

キャリア教育が大切にするキャリア発達やキャリア形成は、すべてのライフステージにおいて把握されるものである。そしてライフステージの一瞬の充実を図るためにはそれぞれの発達段階にふさわしい活動に、子どもが主体的に（自分から・自分で・精一杯）取り組める生活づくりをしていくことが大切である。

2 校内研修②「キャリア教育研修会」（6月3日）

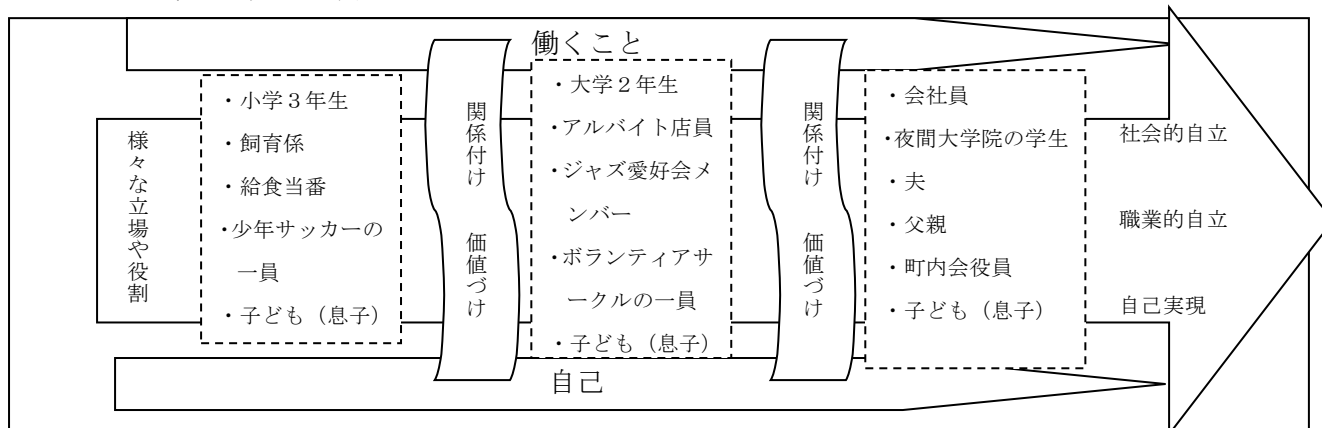
岩手県教育委員会事務局学校教育室指導主事最上一郎氏より「特別支援学校におけるキャリア教育の推進と授業づくり」と題して講義をいただいた。キャリア教育を授業づくりに生かすためのポイントを確認することができた。項目について一部抜粋したものは以下のとおりである。

I キャリア教育について

1 キャリア教育の基本的考え方

- (1) キャリア教育は一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育。
- (2) キャリア発達とは社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程。
- (3) ワークライフは職業経歴や仕事、就労に必要な資質・能力などであり、ライフキャリアは就労に限定せず、人の生涯全ての場面で必要とされるものであり、乳幼児期から高齢期までの全てのライフステージで存在する。

2 キャリア発達の例示



II 特別支援教育とキャリア教育

1 特別支援教育の理念

特別支援教育は障がいのある幼児児童生徒の自立や社会参加に向けた主体的な取り組みを支援するという視点に立ち、幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズを把握し、その持てる力を高め、生活や学習上の困難を改善又は克服するため適切な指導及び必要な支援を行うものである。

2 特別支援教育とキャリア教育

特別支援教育は自立と社会参加を目指す教育であり、キャリア教育は一人一人の社会的・職業的自立を目指して行う教育であることからこれら2つの教育は「自立」という教育目標を共有していることを意味する。

特別支援教育におけるキャリア教育の視点に立った時、どのようなことを実践するべきか。

- (1) 学校づくりは、キャリア発達や個の自立を促すという視点から従来の教育の在り方を幅広く見直し、改革していく理念や方向性→学校教育目標や学部目標、教育課程を見直す。
- (2) 授業づくりは、一人一人の必要な意欲・態度や能力を育てることを通して、キャリア発達を支援する教育→学習指導要領や障がい特性等を理解し、学校教育目標や学部目標等をふまえ、個別の指導計画等に基づいた授業づくりを行う。

III 授業づくり

1 キャリア発達を促す授業

- (1) 知的障がい教育が生活中心の考えに基づいて大切にしてきた本人主体の本質的な授業。
- (2) 子どもたちが「やりたい」「できる」「分かる」と思える主体的に取り組む授業。
- (3) 「できてうれしい」を「認められてうれしい」、「人の役に立ててうれしい」につなげるような工夫がなされている授業。

2 授業改善のポイント

- (1) 何のための授業、活動、支援なのか確認すること。
- (2) 自立に向けた主体性・意欲の育成になっているか。
- (3) 評価は児童生徒の側だけでなく指導者側の評価も大切である。

IV まとめ

キャリア発達を促す授業づくりは学校全体で教職員間の共通理解のもとに推進していく必要がある。そのためにも各学部で行われてきた教育実践を一貫的・連続的なものとして改めて認識し直すことが大切であり、子どもが授業や学校生活において明確な目標と役割をもって主体的に参加できるように教職員が日々授業づくりおよび改善に取り組んでいかなければならない。

3 全校授業研究会（11月21日）

今年度は、高等部の調理班の作業学習の研究授業及び授業研究会を行った。チーム交流研究会に指定しており、研究会では事例対象の生徒やキャリア教育における授業づくりの観点などについての意見交換がなされた。

IX まとめ（成果）

1 3年次研究のまとめに向けた取組

3年次研究の3年目となる今年度は、各研究チームに残された課題の解決と実践の更なる蓄積を目的として取り組んだ。実践の蓄積では昨年度の課題を受け、児童生徒の主体的な活動の設定を授業の中心に据えながらも授業案における「導入」、「展開」、「振り返り」を意識した授業づくりを実践したことで授業展開が明確になり、児童生徒一人一人が自分の目標を意識して取り組む姿がみられるようになった。

各研究チームの課題においては、「児童の具体的な姿を授業案に盛り込む」、「生徒の今のニーズをしっかりと捉える」、「生徒の実態と目標、支援の手だてをリンクさせる」など各チームによって異なるものの、年度初めにチーム内で共通理解したうえで研究授業で実践し、議論を通して課題解決を図ることができた。

また、本研究のサブテーマである「一貫性・連続性を実現するためのチーム交流研究会の充実」では各学部間での授業参観や研究会参加を通して、情報の共有化と他チームでの協議内容、助言等を自分たちの授業改善に役立てることができた。

2 キャリア教育の視点に立った児童生徒主体の授業づくり

(1) 「児童生徒主体の授業づくりにおけるキャリア教育の視点に立った3つの捉え」を検証する。

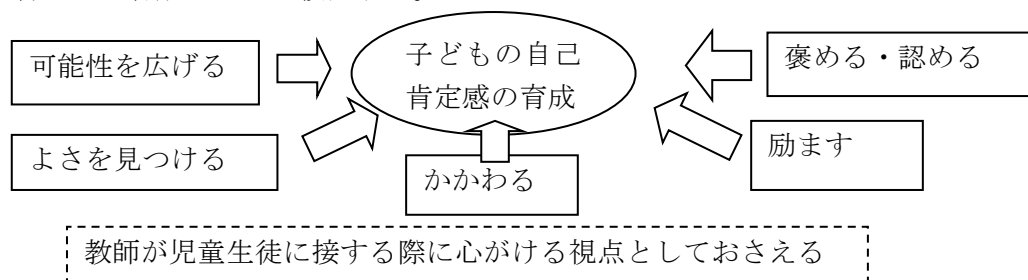
- | |
|---------------------------------|
| ア 「授業及び個々の児童生徒のねらい」の明確化・個別的な捉え。 |
| イ コンピテンシー（能力観）での捉え。 |
| ウ 授業及び個々の児童生徒への学習プログラムからの捉え。 |

「ア」については授業及び個々の児童生徒に対するねらいを「～することができる」と明記したり、「授業のねらい」と「個別の指導計画の目標」と「活動のねらい」をリンクさせるようにすることで、教師が授業内で児童生徒に達成させたい目標を明確にすることができた。

「イ」については「エピソード記入シート」を活用した。学校生活場面で児童生徒が自発的に取り組んでいる題材を授業に盛り込んだことで意欲的に活動に取り組む様子がみられたり、授業で取り組んだ題材に児童が関心を示し、単元が終了した後も余暇場面で自発的に取り組む姿がみられるようになったというエピソードの報告があった。

「ウ」については「学習プログラム（みたけ版）」における「5つの力」の中から適用する項目を「授業のねらい」及び「個々の児童生徒へのねらい」に記載することで、参観者にとって授業にキャリア発達の観点がどのように含まれているか意識できるようになった。

(2) 自己肯定感の育成について検証する。



自己肯定感の育成については教師が児童生徒に接する際の5つの観点をもとに「エピソード記入シート」を使用して検証した。これについては授業者が自己肯定感の観点を記載して授業を実施したことで活動に意欲的になったり、自主性が生まれたように感じると意見があったが、一単元計画における授業実践の期間だけでは児童生徒の変容を十分に検証することが難しいという課題が残った。

(3) チーム交流研究会について検証する。

授業案のほかにビデオカメラを活用したので、報告者と説明を受ける職員もイメージを共有できた。参観体制は各チームの実情もあり、必ずしも全員が参観できたわけではなかったが、

無理のない範囲で各学部間において参観する体制を継続することができた。

(4) 事例対象児童生徒の支援指導方法について検証する。

本学習プログラムの「5つの力」を事例対象児童生徒に適用し、エピソード記入シートを活用してその変容を追った。その結果、1単元計画で授業を展開する中で、授業者による一定の観点のもとに行動の変容を追うことができた。また、エピソードの記入に関しては授業者に負担がかかった面もあるが、行動変容に関する支援指導方法を客観的に評価できるという点では有効であったと思われた。

3 総括

中教審答申(2011)では、キャリア教育とは一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基礎となる能力や態度を育てることを通してキャリア発達を促す教育であり、ワーク及びライフキャリアの自立を目指し、幼児期から教育活動全体を通して取り組むべきであると指摘している。

本校ではキャリア教育の観点から「一人一人がよりよい存在として輝き、主体的に生きられるよう社会的自立を支援する」という学校教育目標の具現化に向け、小・中・高等部段階での指導・支援の一貫性・連続性を高めることを研究テーマとして、平成24年度から3年次計画で推進してきた。

その結果、学習プログラム(みたけ版)を軸にした授業実践を通じて小・中・高等部それぞれの児童生徒の主体的に活動する姿がみられるようになったり、チーム交流授業研究会により各学部の授業を参観し合うことで各発達段階における効果的な指導・支援について教師間で共通理解が深まり、一貫性・連続性の実現に迫ることができた。言い換えれば、IVの研究仮説「小学部から高等部までのつながり、教育内容及び教育方法に一貫性・連続性のある授業実践を重ねれば、児童生徒がより主体的に活動できるであろう」が証明されたと言えるだろう。

また、上記において、「IX まとめ」の「キャリア教育の視点に立った児童生徒主体の授業づくり」では「自己肯定感の育成」について課題が残ったものの、概ねは成果があったと考える。

そして、小・中・高等部においては、その学習段階において抱える課題や「児童生徒の願う姿」について違いはあるものの、児童生徒の将来的な自立・社会参加に向けた、各学部段階でキャリア発達を促す指導・支援の在り方について全職員が改めて意識できるようになったことが本研究最大の成果であろう。しかし、本研究では「遊び」、「生活単元学習」、「作業学習」の領域・教科を合わせた指導に限定してキャリア教育の観点から一貫性・連続性の実現について検証してきたが、例えば国語・算数などの「教科別の指導」、自立活動などの「領域別の指導」については検証されていないことや各授業を含めた学校生活全般というマクロな視点から児童生徒の主体的な姿を指導・支援し、キャリア発達を促すシステム構築まで検討されなかったことは、今後の課題であると思われる。よって、児童生徒のキャリア発達を促す授業実践は、これからも追求していくテーマであり、常に意識し続ける必要があると考える。

- 参考文献等 平成25年度 研究集録 岩手県立盛岡みたけ支援学校
特別支援学校(知的)キャリア教育推進ガイドブック 理解編
岩手県立総合教育センター
平成26年度岩手県高等学校教育研究会特別支援学校教育部会講演会
「特別支援教育における授業づくり ～キャリア教育の観点から～」
創価大学教育学部児童教育学科 教授 藤原 義博氏
於 岩手県立盛岡みたけ支援学校
知的障害特別支援学校のキャリア教育の手引き～実践編
全国特別支援学校知的障害教育校長会
ジアース教育新社